

「罪人」としての矜持

越川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

わたしたちの罪を赦してください、
わたしたちも自分に負い目のある人を
皆赦しますから。

(ルカによる福音書 11 章4a節)

「罪」と「罪人」

キリスト教や聖書には「罪」とか「罪人」という言葉が頻繁に出てきます。しかし考えてみると、同志社のようなキリスト教主義学校では、あまり使われない言葉のように思います。実際、このチャペル・アワーに毎週3回ずつ出ている、お話しされる奨励者の口から「罪」について聞くことはめったにありません。キリスト教学校という場合、大学であれ小中高などの学校であれ、第一義的には神の愛や隣人愛を始めとする、ポジティブな内容のメッセージが中心で、聖書を通して心を育む、精神的に成長するという積極的な側面が重んじられているように思います。

それに対して、「罪」という言葉は明るい言葉でもなければ、夢や希望を与えるような言葉でもありません。これからの人生に前向きに取り組んでいこうとする若い人々にとって、「罪」というのはずいぶん暗い、ネガティブなイメージに感じられることでしょう。

しかしキリスト教において、罪を語らずに人間について語るができるのかと言えば、少なくとも私はそれはできないと考えます。「罪」について語ること、「罪」を意識することは、私たちが人生を送っていく上で、実はひじょうに重要なことであると思います。

キリスト教では「人は皆、罪人です」と言いますが、たとえ「罪」と呼ぶかどうかはさておいて、およそどのような宗教であれ文化であれ、人間というものは、自分自身の内部に何やら得体の知れないドロドロしたものを持っている、自分でも制御しきれない不気味な何かを抱え込んでいるような生き物だということを感じ取り、それを教えてきたさまざまな伝統や習慣があったと思います。時にそれは民話や昔話のような形で、時にはまた戒めやタブーのような形で、世代から世代に伝えられてきた智慧であり、人間が生きていく上で必ず覚えておくべきものとされてきたのです。

聖書にあるアダムとエバの墮落の物語、ノアの方舟の物語、バベルの塔の物語は皆、そういう罪の物語であり、ギリシア神話に登場するパンドラの壺などもそうしたもののひとつの例でしょう。これと似た、人間の中にある、どうしようもない愚かさや恐ろしさを語る話は日本でもたくさん伝えられてきました。

現代の問題のひとつは、そうした人間の中に根深く存在する「罪」の問題を教えなくなったこと、先人たちが伝えてきた人間の内奥に潜む問題を見ようとしなくなったことにあります。「罪」を意識することが

なくなったとしても、「罪」がなくなるわけではありません。「罪」を意識しないまま「罪」を犯すという、むしろより悪い結果をもたらすことになるだけです。

「良心教育」を掲げる同志社であればこそ、この「罪」の問題を自分の問題として考え、意識化することは不可欠であると思います。「罪」は、ある意味、「良心」の対極に位置するものであり、「罪」を考えることは「良心」を考える土台となるものだからです。そこでまず私たちの学校の創立者である新島襄の言葉を紹介します。

「罪とはなんぞや」～新島襄の言葉から

今日、学内で知られている新島の言葉の多くは先ほども言ったようなポジティブな内容のものが多いのですが、さすがにキリスト教徒であり牧師であった新島は決して「罪」を看過していません。新島は「神の愛」という文章の中で、「人類の歴史、特に神に選ばれた民の歴史を概観いたしますと、すべての記録は彼らの罪と愚行の記録に過ぎないのであります」と言い、「罪」とは「人間の中にある、手で触れることはできないけれど確実に存在する実体、すなわち人間の道徳性を蝕み続ける要素」と語っています（『新島襄 教育宗教論集』岩波書店 2010年 144頁）。そしてその新島自身が、キリスト教に出会う以前、「私の靈魂に罪という大なる病気があつた」と告白し、そうした自らの犯した罪の実態に触れて、「傲慢、飾非、偽善、嫉妬、憎悪、放蕩、淫乱、実に慚愧に堪えざる程の大患なり」と記しています（「靈魂の病」、同197頁）

＊飾非（しょくひ）：「非」を「飾り」隠すこと。非行非道を言い繕いごまかすこと

さらに「罪とはなんぞや」と題した文章で、新島は「罪と申すは他に非ず、すなわち神の命令に背き、或いは人倫の道を乱し、或いは己れの心において、濟まざると思う事を犯すを皆、罪と云う」と答えています。そして、「悪しきと知りつつこれを為すときは、すなわち天の命に背き、又は己の心の規則を犯す事なり」と言います（同181頁）。すなわち、「良心に恥ずべきことを行うのが罪」であり、「罪とは自らの良心を犯す」ことであると言うのです。ここにおいて「罪と良心」は表裏一体の関係にあります。新島はさらに続けて、もとより良心なき者は罪を罪と感じることもないと論じ、「罪を罪とも思わぬ者は、一切平気にして、己れの心を苦しむる事はなかるべし」（同182頁）と断じています。すなわち、罪を意識しないことは良心の死滅、人間性の破綻に繋がるということでしょう。

「罪」の分析～「罪」と「悪」

さてここでいささか神学的に「罪」について分析します。キリスト教で「罪」という場合、一般的には神に背くことを意味します。また「罪」という言葉で、人間が行うひとつひとつの悪しき行為を指すこともあります。そうした個別の罪のおおもとにいわゆる「原罪」と呼ばれる、罪を犯す根源的な人間の本性があるとキリスト教では考えます。

私の考えでは、この「原罪」は「自由」というものと密接に関わっており、罪と自由はいわば不可分のものであると思います。分かりやすく言えば、自由を誤って用いる時、自由を利己的に用いる時、それが「原罪」という本性と呼応するようにしてさまざまな問題が生じ、個々の「罪」が現出するということです。

キリスト教の母胎となったユダヤ教では、人が罪を犯す場合、何か外からの悪い力が働きかけてその

きっかけとなると考えていました。そうした悪の力が後に擬人化されて悪魔とか悪霊と表現されるようになっていきます。外から働きかける悪しき力に、「原罪」という本性、「自由」という本性を持つ私たち人間が誘い込まれる時、実際の罪が生じるということです。先ほど読んだ聖書の中で、イエスは「わたしたちの罪を赦してください」という祈りに続けて、「わたしたちを誘惑に遭わせないでください」と祈るのですが、この「誘惑」こそ外から人間に働きかける力であり、その力が人間には抵抗できないほど強く、巧みな誘惑であることをイエスは知っていました。だからこそ「誘惑に打ち勝つ力をください」ではなく、「誘惑に遭わせないでください」と祈ることを教えたのです。

「罪」「自由」「良心」

古代の人々は、人間の周りを取りまくさまざまな力、状況、出来事に対して、おそらく今の私たちよりもはるかに敏感だったのでしょう。そしてそういう感覚や警戒を忘れないために、罪に関する教え、罪を語り伝えるいろいろな伝承を残したのだと思います。

現代人は古代人よりも強いのでしょうか。私たちは自由の正しい使い方を身に着けているのでしょうか。今日、私たちの周りに生じる無数の罪の出来事、身近に経験する人間と人間との諍いから始まって、大は戦争、政治や経済の世界で生じる不正、格差、混乱といった出来事は、まさに今ここにある罪のリアルな現実を示しています。

罪をまじめに語らなくなった時代に、まさに罪が力を得る。罪を教えなくなった時代に、まさに罪がはびこる。罪を忘れた時代に、まさに罪の時代がやって来る。悪霊や悪魔は時代と共にさまざまに姿形を変えて私たちの日常に出没し、時にはパソコンやスマホを通して、あるいはまた社会的構造的な制度や仕組みを通して働きかけ、私たちはそうした誘惑の力に日々晒されつづけています

人は皆、罪人なのです。私もその一人であり、皆さんもその一人です。人は皆、罪を犯す本性、素質、可能性を秘めていることを忘れてはなりません。けれども、聖書における罪は神が私たちに与えられた自由や良心といった重要な贈り物と切り離しがたく結びついたものでもあります。「罪」「良心」そして「自由」はひとつながりのことがらとして、教え、学び、記憶しなければなりません。罪を意識することは、同時に神が私たちに与えてくださった自由を意識し、良心に基づいてそれをういよと呼びかけておられる神の声を聞きとる機会にもなります。「人は皆、罪人です」というメッセージは「人は皆、良心によって生きる」というメッセージと裏腹です。どちらを選ぶかは、自由という神の贈り物を私たちがどのように用いるかに掛かっています。

今日、メッセージのタイトルに「『罪人』としての矜持」と付けました。「矜持」は普通、「プライド」とか「自尊心」「自負心」の意味ですから、「『罪人』としてのプライド・自尊心」というのはちょっとおかしな表現です。「『罪人』としての矜持」とは、「罪人であることの開き直り」ではなく、「罪」を通して「良心」を思い、「自由」を考え、「罪人」でありつつ「良心」と「自由」によって生きる道を与えられている人間としての誇りということです。神がそのような私たちを配慮し、私たちに向き合ってくださいます。

1年間の終わりを迎えようとしている時期、卒業される方もおられると思います。「罪」についての話はあまり愉快ではなかったかもしれません。しかし、これからの人生という長丁場の中で悪の力や誘惑に陥ってしまいそうになる時、踏みとどまる足場をどこに置いたらいいのか。人間というものがいろいろな弱さ

や問題を抱えながら、しかしそれでも良い生き方をするためにどこに人生の原点を置いたらいいのか。
「罪」というワードを通して、どうか考えてみていただければ幸いです。

2023年1月25日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録